語学教育研究論叢第20号

《名付け》に見る若者のことばと文字
―アルファベット文字の増加を中心に―

矢崎　祥子

Word-coinage in English among Japanese youth

YAZAKI Sachiko

[Abstract]

In June 2002, during the World Cup Football Tournaments, we have seen several times on TV and newspapers the 'W 杯' and 'FIFA'. This paper discusses the Japanese way of adoption of foreign civilization, through foreign words and letters, especially focusing on words written in Latin alphabet rather than Kana or Chinese characters. In a questionnaire I asked my students to invent a title for a new TV programme and the result proved that 17 percent of the TV titles were written in English.

1．はじめに

筆者は「日本事情」という視点から現代日本の諸事情を再考する機会を得た[1)]。本稿はその考察の一つとして文字事情から日本の文化受容を考え、また増加中のアルファベット文字に注目したものである。本学板橋校の学生の《名付けた》番組名の、およそ17パーセントが英単語そのものを使用していた。文

字遣いは日本語の場合、そのまま語句、語種の問題でもある。

もともと「日本事情」は日本語学習者のために設けられた科目だが、今では本学のように日本人学生対象の講座も設けられている。地球的規模で国際化・情報化が進み、外国人との交流が増すにつれ日本人自身が日本を振り返る機会も多くなった。日本について再考するには「日本事情（概説）」は最適な教科である。その日本事情の諸問題の中で、文字事情も日本の大きな特徴である。

2．日本の文字事情

「映画 Fan」、「それでもニッポン愛してる」と「映画ファン」、「それでも日本愛してる」と書かれたものは、声に出して読めば同じだが、学生の名付けた前二者の文字遣いは、ある種の視覚的効果がある。日本語は文字の種類が多く、読み方も複雑だと言われるが、その事情を概観してみたい。

2．1　文字受容の概観

周知のように日本はその地理的条件から古代中国文明の多大な影響を受け、その多くを日本的に消化、受容してきた。漢字の受容もその一つである。文字の習熟度が増すに連れ、日本人は漢字を音読みや訓読みにするなど自由に読みとったり、その字形から平仮名、カタカナの二種類の表音文字を案出したり、また漢字様書体、日本製の国字[2)]を作ったりするようになった。

仮名が発明されても和文を書き表すのは簡単ではなかった。小池(1989)によれば「文字というものを使用し始めてから約七百年の歳月をかけて、日本人は…『日本語を書き表わすには、漢字だけでも駄目であり、仮名だけでも駄目である』という」(P107)結論を出し、和漢混淆文の時代に入った。本の目次は「日本語の音韻の発見」、「近代文体の創造」、「日本語の文法の創造」と続き、日本語の表記をめぐって模索が続いたことを表している。その後、戦後の漢字規制などの紆余曲折を経て、ようやく日本語は現在のような漢字仮名交じり文に落ち着いたのである。

識字の面ではどうであろうか。たとえば網野(1991)は明治初期に日本に滞在

したロシア人のメーチニコフが「…横浜で、人力車夫、馬の別当、お茶屋さんで使われている娘さんなどが、暇さえあれば、懐から小さな冊子を出して本を読んでいるのを見て、非常にびっくりし」た(P15)という例をひき、当時の都会の識字率の高さをあげている。また辻本(1999)は、江戸後期には「都市でも村でも、東北でも九州でも」(P21)歩いて行ける距離に手習い塾（寺子屋）があり、志あれば庶民も文字の読み書きが出来る条件にあったと言う。

じつはこのように日本人の多くがある程度の知的財産を共有していたことは、明治期、日本が近代西欧諸国を目標にしたときに大いに役立った。日欧の比較文化に見識のある松原はその著『日本の知恵・ヨーロッパの知恵』(1987)で、いくつかの国の例をあげ、それらの国々のリーダーたちが「ヨーロッパ文明を採り入れて、立ち遅れた自国の近代化を計ろうとして失敗した」のは、「その国民のほとんどがその必要性を理解するだけの精神的態度を欠き、それを受け容れて使いこなすだけの知的水準を養ってこなかったからである。…中略…一つの民族に今までの後進性から即刻足を洗って最新の文明を採り入れよといってもできるものではない。…中略… 近代化を遂行するためには国民の精神的態度と知的能力がすでに何世紀にもわたって磨かれていなければならない」(P24-25)と指摘し、日本が中世からさまざまな分野でいかに発達していたかを、具体的な数値をあげて実証している。

文字・語彙について言えば、当時の識者、啓蒙家である西周や福沢諭吉などは西欧文明を取り入れるのに数多くの和製漢語（近代漢語）を案出した[3)]が、これらの語を一般人もかなり楽に消化することができたのは、次節で述べるような理由から漢語の多くは一見して意味を理解できたからでもある。

2．2　音訓両読みからみる日本の異文化消化

日本と同様、朝鮮半島でもベトナムでもかつて同じように漢字を受容した。だがそれらの地では漢字や漢語は字音（音読み）でしか読まず、日本語のように訓読みという方法が発達しなかった。すなわち以下に述べるように漢字の音訓両読みは日本の文化受容の特徴の一つと言える。

鈴木(1990)は『日本語と外国語』で漢字の多くに音読みと訓読みがあるために、英語圏と比較すると一般人も学術用語を簡単に理解することができるという例を豊富にあげている。例えばラテン語の 'gingival' は音声学の用語だが、この日本語をローマ字で書けば 'shikeion' となる。学術用語なので 'shikeion' とは一見して意味がわからない人の方が多いであろう。表音文字の場合、聞いて意味が判らない語は書いても判らなさは同じである。

しかし '歯茎音' と書けば意味まで一目で理解できる。その一瞬の理解の過程をスローモーション画像のようにあえて分析すれば、シケイオン－歯茎音－はぐきのおと、となり、漢字の音訓を通じて理解していることが判る。

音訓読みについては、森岡(1987)も日本語の基本語のほとんどが、ウー雨－あめ、モクー木－き、のように音訓両通で「漢字を知る日本人なら、例外なく、音と訓とを同じ漢字の違った読み方としてとらえ、漢字を媒介として同一語意識を成立させている」(P49)と多くの例をあげている。

基本的に音は漢語、訓は和語なので、見方によっては現在私たちの使用している漢字は、結果として和語と漢語を結び付けているとも解釈できる。この日本人の用法は、表意文字としての漢字の〈読み方より意味優先〉の性質を存分に発揮させていると考えられる。森岡も言うように、アラビア数字が諸言語における数の読み方を担うのとよく似た現象と言える。

さてそのような日本語の現状に、新しい読み方が出現しつつある。その一つが2002年６月に行われたサッカーのW杯である。「W杯」は「ダブルハイ」でなく「ワールドカップ」と読むらしい。その場合、〈杯〉は音読の〈ハイ〉、訓読の〈さかづき〉に加え、英語読みの〈カップ〉の音価をもになうことになる。カップ(cup)の頭文字、Ｃを使うとＷＣとなり違う単語が連想される。新聞社では紙面の制約上ワールドカップの替わりに、〈W杯〉と書いたのであろう。もとはと言えば苦肉の策だったのかも知れないが、にわかサッカーファンの急増とあいまってこの読み方は、あっという間に人口に膾炙したようである。

2．3　異文化受容にみる日本人の柔軟性

このような読み方は、以下に述べるように日本人の柔軟性の表れであると言えないだろうか。日本事情として日本・日本人・日本語・日本社会などを観察していると、日本人はものごとを柔軟に受け止めるという特徴があることは明瞭である。断定をきらい、白黒をはっきりつけず、どちらも受け容れるという姿勢は、マイナスととらえる場合、あいまい、いい加減、変わり身が早いとされるが、プラス面が強調されれば、両者を受け容れ存続させる、ものごとを両立させる、寛容でおおらか、懐が深い、柔軟性があると解釈される。

文字事情の面からみる日本の柔軟性を表すものとして、熟字訓やあて字の用法が考えられる。熟字訓とは、〈小豆〉を〈あずき〉、〈土産〉を〈みやげ〉と読ませるもので、常用漢字の付表（『公用文の書き表し方の基準』1991）には、このほか雪崩（なだれ）、眼鏡（めがね）、雑魚（ざこ）などいわゆる熟字訓が110例あがっている。これら110語は、いわば公に認められた語句であり、実際はもっとずっと多い。

竹浪(1987)は熟字訓とは「熟字の語義と訓の連合が合理的で、かつ慣用されること久しく、その連合が緊密になった場合、熟字訓は漢字の定訓と同様の資格を獲得したものと考え」(P307)られるものだとする。

このような熟字訓という定義には厳密にいえばあてはまらないが、漢字に自分の気持ちを託してルビを振ることはよくある。たとえば歌詞では〈運命〉を〈さだめ〉、〈別離〉を〈わかれ〉と読ませたり、ときには〈あの男（ひと）〉も〈あの女（ひと）〉も同じルビとなる。作詞者は〈ひと〉だけでも〈男〉あるいは〈女〉だけでも満足せず、漢字とルビの両表記をして初めてうたごころを伝えたという思いがするのではないだろうか。

この方法は種々の文章にも見られる。たとえば井上やすし(1993)にも材料（ネタ）交信（やりとり）　会話（やりとり）　現在（いま）……などがある。なかでも〈やりとり〉は、交信のやりとりか、会話でのやりとりかを瞬時に伝えることができる。

また新しい概念を導入する際、日本語としてこなれていない場合、あるいは意味を一つにしぼりきれない場合などにも振り仮名が使われる。以下は多田富雄(1993)からの引用例である。

超(スーパー)システム　管(チューブ)　同一性(アイデンティティ)　所属(アイデンティティ)　本文(テキスト)　鍵言葉(キーワード)……

ルビは明治期の作家の文には非常に多く見られ、竹浪（同上）は「とりわけ近代においては氾濫といってよいほど大量に見」(P305)られると述べている。

そして現在、漢字だけでなくアルファベット文字にルビを「振りたい」ような場合も出てきた。たとえばＴＶはティーヴィーでなくテレビと読む人が多いと思われるし、ＣＭもシーエムでなくコマーシャルとしたり、頭の中で広告と読み替えても自由である。先に見たW杯も、上記の例と同じ仕組みである。

じつは、これらの例のように表音文字であっても、その通りにしか読まないということはない。鈴木は前掲書で欧米人に音訓の仕組みを理解してもらう例として、省略語〈e.g.〉をとりあげ、これを〈イー・ジー〉とそのままアルファベット読みにする場合と、意味を汲んで〈for example〉と英語読みにする場合と、もとのラテン語で読む場合とがある、という例をあげている(P146-147)。これは語の塊(かたまり)に意味をあてる熟字訓と同じ成立の仕方である。

このように自由な読み方を嘆き、日本語には正字法（正書法）がないとする意見[4]もあるが、表音文字の欧米の綴り字法と、上述したような日本の文字事情とは基本的に異なっているため、西欧の正字法を日本語にあてはめることは無理なことと思われる。むしろ上述の例のように一つに決めずにさまざまな意味をだぶらせて楽しむのが本来の日本人的思考ではないだろうか。重箱読み、湯桶読みも日本語化の一つだが、その考察は別の機会に譲りたい[5]。

今日、英語の情報化・グローバル化は世界的にも顕著だが、この流れがこのまま続くなら、日本語にも英語がもっと流入し、それに伴って上述したような日本語的読み方や書き方、すなわち日本語化される語も増すと思われる。漢字・漢語の日本語化と同じ様に、英語もナイターのような和製英語、right もlight もライトになる日本語音化のほかに、W杯的混ぜ書きや訓読みならぬ‘英語読み’が増えて、日本語に吸収する形になるのではないだろうか。

２．４　現在の日本語の中のアルファベット文字

上述したように近年、日本語文でアルファベット文字を使う機会が増えてき

ている。オバタ(2001)はこれらのアルファベット文字を、以下の十種に分類している(P113-114)。(用例もオバタによる)

1. 日本語のローマ字化…「Tokyo、arigatou」など
2. 英語の語彙そのまま…「『No と言える日本』、TAXI はこちら」など。
3. 和製英語…「2DK、JR 線」など。
4. 英語語彙からの頭文字の羅列…「VIP、CD、PR」など。
5. 日本語語彙からの頭文字の羅列…「NHK、NTT」など。
6. 英語以外の言語の使用…「boutique(フランス語)、pizza(イタリア語)」など。
7. 引用…「"To be or not to be"」などの句、「"Hamlet"」などの題名、「John Smith、USA」のような固有名詞など。
8. 記号化…「H_2O」などの化学記号、「jkf1298」などの商品番号。
9. 特定物(事/者/数)の不特定命名・・・「A市、B件、T君、Y時間」など。
10. 計量語の単位・・・「cm、kg、㎡、ml、t」など。

この分類によれば英単語そのものは上記の一項目に過ぎない。またたとえば長さの単位はメートル m、重さはグラム g で学習されるため、「小学生の頭脳では計量語はABC文字(=アルファベット文字の略)が常識」(P132)となり、定数を表すx、yが代表するように「中学生の頭脳では『不特定命名』概念はABC文字」(同上)になる。すなわちオバタが指摘するように、たしかに欧米式の単位や命名法などが日本語の中に浸透してきている。

以上のような文字事情、語彙事情の現今、筆者は次節のようなアンケートを施行した。

3. 学生のアルファベット文字使用の実態

筆者は本学「日本事情概説」の平成十三年度および十四年度の受講生に「カメラ、車、見せたいテレビ番組に名をつける」という調査を行った。本稿では

調査時におけるアルファベット文字の使用状況を考察したい。なお受講生は、上述のような日本の文字事情については、調査時点では講義を受けていない。

3．1 「番組名の名付け」作業と学生の心理状態

調査は「'新製品・新番組'を売り出します。例のようにして、キャッチフレーズ（うたい文句・惹句）と新名（愛称）を考えて下さい。」に続き「あのナポレオンも愛用!! 胃弱の人に効果抜群『胃活』」など二例を見て、各自が新車とカメラの惹句と新製品名を考える。三番目は「テレビの新番組」として「金曜日の夜の一時間　どんな番組があればいいと思いますか？　あなたがプロデューサーだとしたら、どんな風に売り出しますか？」という設問で、惹句とテレビ番組名および視聴者とジャンルを書いてもらうという問題である。

この調査は前週からの日本事情の考察の一つ、「命名の心理」とする授業の締めくくりである。学生はまず命名の心理についてさまざまな角度からの講義を受けている。例えば、外国と日本の地名や人名についての共通点や相違点、森岡ほか(1985)の『命名の言語学』の例、消費者の心理、名付けの「名」、すなわち日本語の語構成や語種の説明、さらにネーミングライターという職業についてのテープを聞くなど、命名の力とことばの影響力についての情報を受けている。

これらの授業の後に調査用紙が配られた。学生は自分の想定する視聴者に、どのように番組を紹介し、どんな題名をつければ人を惹きつけるかに心を砕いているはずである。このような心理状態、すなわちどういうことば、語句を使うかに腐心している場合の文字使用は、図らずも現代の若者の自然な文字の使い方を知るのに、結果として最適な調査となったと思われる。

3．2 学生の漢字に対する考え方

従来、漢字に対する考え方には、学習するのに非効率だという否定的な意見もある。しかしながら近代化に成功した日本の文字システムが漢字仮名交じり文であったことを思えば、経済・技術・教育などの諸分野において、情報の伝

達をする際に、漢字は少なくとも邪魔をしなかったことを証明したことになる。

それどころか、いったん学習してしまえば漢字は効率的な文字組織であり、その長所は多いとする考え[6]はかなりある。とくにコンピュータで漢字を楽に打ち出せるようになってからは、漢字を否定的に見る見方は影をひそめた。

現在までのところ漢字を、効率化を妨げる余計なものと主張する意見が出てきた時期を調べると、第一回目は西欧文明に後れを取っていると感じた明治期、第二回目は敗戦後、焦土の日本と豊かなアメリカとを比較し、タイプライターの文書処理能力の彼我の差などを痛感したときである[7]。ここでその主張について深入りする紙幅はないが、アメリカ中心の欧米文化吸収に熱心な日本には、文字も含めてことば、文化がこれからも入ってくることであろう。

さてこのような漢字に対する見解という点からみれば、本学の「日本事情概説」受講者すなわち日本人学生は、概して漢字に理解が深く、好意的であるといえる。受講者が日本語学科と日本文学科に在籍している者たちであること、また本学が中国語科や書道科を備え、漢字の仕組みや働きを理解し尊重する環境にあること、などと無関係ではないと思われる。

3．3　調査結果と考察

結果は題名合計数81例のうち、アルファベット文字使用の題名は14例、題名全体の17.3％にあたる。なお題名中のアルファベット文字は、すべて、オバタ分類の２番目、英単語として使われていた。以下はその例である。

「Jazz Cafe」「青春ジューク Box」「Sounds Grooovy」

「present プレゼント」「Quiz 金のなる金曜日!!」

「笑 TIME」「～ 1 hour」…

アルファベット文字を一字でも使用している題名という基準で抜き出したが、結果は一字のみはなく、「Jazz Cafe」のように題名全部、「笑 TIME」のように語句の一部、「present プレゼント」のように同じ意味の英語と日本語の並立、「Quiz 金のなる金曜日!!」のように題名の一部、という種類であった。

実際のテレビ番組での割合はどうであろうか。実際の番組表は紙面の制約も

あり、N、天 などの記号が多い。記号のみのものとニュースは数に入れないと実際のテレビ番組（2002.7.5金曜日午後東京地方）の結果は46番組中７番組で約15.2%、「ニュース JAPAN」のような番組名のついているニュースを数えた場合は「ＮＨＫニュース10」、「筑紫哲也 NEWS23」、「Ｊチャン」…のようにアルファベット文字の割合が増えるので、64番組中12番組、約18.8%となった。学生の命名と実際の番組でのアルファベット文字率の大きな乖離は見られないと言えよう。

また両者の相違点としては、実際の番組名は紙面の制約のためか、「メントレＧ」、「ERM・緊急救命室」、「WBS」という省略形が多いことである。

言うまでもなくアルファベット文字の割合の高さはタイトルにおける割合だからである。本調査でも、添えられている惹句や説明文におけるアルファベット文字はあきらかに少なく、ＴＶ、ＣＭなどの略語が散見される程度である。なお英字を使ってはいないが「ザ☆癒し系」のように英語文型を取り入れている題名は若干見られた。

ちなみにおよそ30年前のテレビ番組欄（朝日新聞　1965年６月11日金曜日）では、アルファベット文字は、ニュースの略語として黒地に白抜き文字に書かれた N があるのみであった。

日本語における英語とアルファベット文字の増加は、日本が現在もアメリカ中心の英米文化咀嚼中であることを示しているとも言える。この状況は2002年度から始まった小学生にも英語授業を課すといったことも加わって、これからの何年かは2節で述べた‘日本語化’もしながらもっと進むことが予測される。

おわりに

前出オバタは「…近未来に漢字が世界の全人種、全言語の共通言語になる可能性が低いことと、コンピュータの発明・発展が英語圏を中心にしたアルファベット文字での情報を基礎としていることから、漢字は負の表記となる可能性が出てきたと自覚する国際人が増えていることは否定できない」(P137)と述べ

ている。

一方、湯浅(1999)は『人口の文明史』において「壮絶な人災と天災による人口の激烈な損傷･･･にもかかわらず、漢族は決して滅亡することなく、…、いまなお破竹の勢いでもって増大し、遠からず人類の四人に一人を占めようとしている」(P153)と述べている。一人っ子政策がなければこの増大はもっと急カーブだったであろう。

二十一世紀中に地球上で四人に一人が漢民族になるということは、漢字を使う人間が世界の四人に一人は存在すると考えることもできる。

西周(あまね)など近代漢語を作った明治人には、まず漢文の素養があった。それを駆使して膨大な新漢語を創出できたのである。現在漢文学習は英語学習に替わってしまった。先に述べたような日本の特徴、両者を存続させる懐の深さ、を発揮させて両立させることはできないないものだろうか。すさまじい勢いで経済発展をしている中国の文字事情は変化するだろうか。それとも全く新しい情報システムが考案されるのだろうか。興味はつきない。

(注)

(1)筆者は2001年度から本校外国語学部で「日本事情概説」を担当する機会を得た。受講者の大部分は日本人学生である。

(2)国字全般に関してはライマン、エツコ・オバタ1990『日本人の作った漢字国字の諸問題』南雲堂、文化との関係に、矢崎祥子2000「和製漢字の一側面－国字は文化を反映する－」『言語と交流』３号、「部首からみた国字続・国字は文化を反映する」2001同４号ともに言語と交流研究会編　凡人社発売などがある。

(3)張厚泉2000「西 周の『近代漢語』に与えた影響」『言語と交流』３号

(4)野村雅昭1988『漢字の未来』筑摩書房など。

(5)重箱読み・湯桶読みについては矢崎祥子1998「音読み、訓読みについての考察」『言語と交流』創刊号で若干考察した。

(6)鈴木孝夫、森岡健二のほかにも漢字を是とするものは多い。とくに鈴木修

次1990『漢字情報力再発見』創拓社、山田純1984「子どもにとって漢字とは」海保博之編『漢字を科学する』有斐閣選書、石井勲1992『漢字興国論』日本教文社、などは漢字の長所を数多く例証・実証している。

(7)明治期に初代文部大臣森有礼が日本語を英語にと提案したり、戦後、志賀直哉が日本語に替えてフランス語を国語にと提唱したことなどは、鈴木孝夫1975『閉された言語・日本語の世界』新潮選書に詳しい。また1945.11.12の読売新聞の社説は「漢字を廃止せよ」というものであった。

引用・参考文献

網野善彦1991『日本の歴史をよみなおす』筑摩書房

小池清治1989『日本語はいかにつくられたか？』筑摩書房

鈴木孝夫1990『日本語と外国語』岩波新書

竹浪　聰1987「熟字訓」佐藤喜代治編『漢字と日本語』漢字講座第３巻 PP295-308 明治書院

辻本雅史1999『「学び」の復権－模倣と習熟』角川書店

松原久子1987『日本の知恵　ヨーロッパの知恵』三笠書房

森岡健二・山口仲美1985『命名の言語学－ネーミングの諸相－』東海大学出版会

森岡健二1987『文字の機能』明治書院

湯浅赳夫1999『文明の人口史－人類と環境との衝突、一万年史－』新評論

ライマン、エツコ・オバタ2001「日本語の漢字とアルファベット文字」飛田良文ほか編『言語情報』現代日本語講座第１巻 PP112-148　明治書院

語例出典

井上ひさし1993『ニホン語日記』文芸春秋

多田富雄1993『免疫の意味論』青土社